

だからアタシは鬼じゃねえつつってんだろうが！？

七日 八月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——雪のように白い肌。

そこに浮かぶ刺青のような黒い模様。

緋色と山吹色の虹彩異色の瞳。

額から生える一本の黒い角。

彼女の名は『セキレイ』。

彼女は、人を喰らう鬼……

……などではなく、オラクル船団のアクセスに所属するデューマンである。

クラス・ブレイバー、カタナを携えたアクセスが、悪鬼が跳梁跋扈する大正の世を征く！

「だからアタシは鬼じゃねえつつつてんだろうが!？」

……なお、その見た目のせいで鬼殺隊の鬼狩りに散々追い掛け回される模様。

## 目次

鬼を狩る鬼？	1
いいえ、デューマンです。	
アタシの生き方、アタシの生き様。	7



——数十分前。

「…………ふわあ…………良く寝た……………ほア?」

目が覚めた直後、視界に広がった光景に思わず間抜けな声が口からこぼれた。

具体的に言うと、見渡す限りの森&森。何ならベッドの上ですらない草むらの上、おいおいコイツは一体何の冗談だ?

一応頬を抓ってみる、痛い…………夢じゃない。

自分は誰だ? 名前は『セキレイ』、オラクル船団超巨大な惑星航行船団、1隻のマザーシップと多数のアークスシップで編成されている。のアークスオラクル船団に存在する組織、正式名称『Artificial Relict to Keep Species』、訳すると『人為的なる残存種の保護。そのための聖櫃、あるいは方舟』的な意味らしい。の一人だ。

うん、大丈夫、記憶障害とかは一切発生してない。よな…………? 正直自信が無い、だってアタシは昨日、普通にマイルームで就寝した筈、なのに起きたら暗い森の中、イミガワカラナイ。

こんなの誰だつて戸惑う、六芒六芒均衡、旧体制のアークスにおける最高戦力。メンバーは零から六のナンバーを振られる。なお零は基本的に秘匿された存在であるため「七芒均衡じゃないの?」とツッコんではいけない。だろうが守護輝士<sup>ガーディアン</sup>現体制のアークスにおける最高戦力の一角、この肩書きを持つのは主人公(プレイヤー)とヒロインの内の一人の計二人だけ。殆どの権限に縛られない代わりに上位の命令権限等も持たない。だろうが宇宙猫顔晒すに決まってる。本当にイミガワカラナイ——ツ!!

「…………オイちよつと待て、まさかっ!」

そうして状況の確認をしている最中、前にも同じような事があったのを思い出して背筋が凍りついた。

もし以前と同じであれば状況は最悪だ…………! アタシは慌ててア

アイテムパックを確認してみた。

「……ッハア〜、セーフツ！ 丸腰じゃなくて良かったア……!!」

思わず安堵のため息が出る、アイテムパックにはいつもの装備に各種アイテム類がきちんと収まっていた。

本当に良かった……今回は着の身着のまままで放り出された訳ではなかった様だ。

ひとまず、よっぽどの事が無い限りどうにかなりそうな事は判ったので次は現在地の確認だ。

「……マップピングは……出来てるな？」

マップ機能に対するジャミング等は無し、現在居る場所を中心に障害物の位置等がきちんと記録されている。

つまり、ここは特殊な条件下に置かれた異空間等ではないようだ。……まあ空間そのものに異常がなかったとしても状況は異常以外の何物でもないのだが。

「ひとまず歩いてみるかあ……幸い月が見えてるし、今アタシが向いてる方向が南って表示され………あん？ 月イ？」

改めて空を見れば煌々と輝く満月、その表面には見覚えのあるクレーターがたくさん。

あつ、ウサギさんが見えますね！ ……おいマジか。

「ええええ……ウソだろ？ オイ、地球って………なんでエ……？」

声が震える、なんなんだマジで？ 『目が覚めたら現在地はまさかの太陽系第三惑星・地球でした』ってか？ 売れないラノベのタイトルかな？

いつそ『【悲報】現在地はオラクル側の宇宙ですら無かった件【ボスケテ】』ってスレでも立ててやろうか。

……現実逃避はやめよう、悲しくなってきた。

「しかし、そうなると通信が繋がらないのはどういうこと……？」  
現在地が地球であるならば、どこに居ようが通信は本隊にも繋がる筈だ、なのにくらやっても繋がらない。

実はここはアークスシップ内の施設のVR空間で、誰かの仕掛けたドッキリでした、なんていうオチも考えたが、即座に否定する。

「コイツはデータじゃねえ、本物の生き物だ」

目の前の樹木にくっついていた虫がちゃんと生体反応を示している、つまりはそういう事だ。

そうなると、残る可能性は「見つけたぞ鬼めっ!!」……あん？

声のした方向を見れば、どこかで見たような覚えのある服装にカタナを持った男が一人。

なんだかとても殺気立っていらっしやる、隙を見せれば今にも斬りかかって来そうさ。

マップを見ればこちらに接近してくる同じようなサイズの反応、思わず真顔になった。

「コイツ、隙が無い……!」

「焦るな、二人でかかれば……」

どうも敵意剥き出しなその様にため息が漏れる。なるほど、大体わかった。

鬼かー、そつかり、まあ似てるよねえ、アタシってオラクル産のデューマンP S O 2の世界以外、P S UシリーズのP S P o 2 iにも同名の種族が登場する。が、名前だけ同じのほぼ別物。だし。

おそらく今のアタシは死んだ魚みたいな目をしている事だろう、鏡を見なくてもわかる。

デューマン、肌は大抵色白を通り越して白く、そこに部分的に刺青の様な黒い模様が浮かぶ、頭に角を持ち、瞳は特殊な虹彩になりやすい、そんな種族。

遺伝子操作やら何やらで生み出された人造の種族であるが、そもそもアークス全員どの種族もそんな生まれだし、ていうかそんな事はどうでも良い。

鬼、アタシの想像通りなら、おそらく人喰い鬼の化け物の事だろう……見た目が似てるからそんな畜生共と間違えられた？ 冗談じゃねえ!!

「……アタシはあんな畜生共じゃねえ……!」

ぼつりと眩きながらアタシも自分のカタナを取り出す、どこからともなく現れたカタナに目の前の二人組が息を呑むが、知ったことじや

ない。

そうして、得物を構える二人組に視線を向け、いつでも抜刀出来るようにカタナを構えたアタシは――

――その場から脱兎の如く逃げ出した。

仕方ないじゃん！ 何せ相手はフォトンなんかすごいエネルギー、設定的に恐らく何でも出来る（誰でも出来るとは言ってない）。の保護だとかそういう類のモノが一切無い人間。

こちららお前らの敵よりもつとヤベー化け物と普段から殺しあっているのだ、加減に失敗したらどうなるか想像したくない。

何より撃退するなんてもつてのほかだし、下手に交戦した結果どんな影響があるか判ったモンじゃないし。

「?!」

「逃げた!? 追うぞっ!!」

全く以ってフザケてやがる。ああそうかい、今度はよりもよって『鬼滅の刃』か。

「またかよクソがふざけんなア!!」

ブチギレながら全力でカタナのフォトンアーツ略称PA、ドラクエで言う特技、なおドラクエで言う魔法的な物はテクニクという物が該当する。アサギリレンダン高速移動した後には静止して前方を斬り刻むPA、静止する前にキャンセル出来る。を連打して逃げる、長距離移動が前提なので今回はガーキャンガードキャンセル、なおガーキャンしたアサギリは全移動系PA中最速。ではなくステキャンステップキャンセル、アサギリステキャンも十分はよい。でいい、さーてトンスラだー！（涙）

……なんか途中に件の人喰い鬼が居たからすれ違い様に斬り捨てた、ちよつとスツキリした。

「……馬鹿な、鬼が鬼を狩っただと……？」  
「一体どうなっているんだ……!？」

アタシの生き方、アタシの生き様。

——走る、走る、森の中を、どこまでも速く、早く、眼前の敵<sup>クズ</sup>を撃滅する為に。

「ク、クソオツ！ な、何で同族が俺の命を狙うんだよおっ!？」

アタシから逃げ続けている片腕の無い鬼畜生が喚き散らしているが知った事じゃない。

だってアタシ、お前らの同族じゃねえし。

大体テメエは命乞いをした人間を見逃したりしたか？ 折角のエサを逃がすワケねえよなあ、だってテメエは人喰い鬼だもんなあ。

「そ、そうだ！ 俺と組まねえか!? あ、アンタの下にならついてやってもいいっ!! あの位の村なら、アンタとなら鬼狩りにバレル前に一網打尽だぜえっ!？」

「……………ハア……………」

素晴らしい提案をしよう、とでも言わんばかりに戯言を抜かす鬼<sup>ゴミ</sup>のため息が出る。いやはや全くこの鬼<sup>ゴミ</sup>は本当にアタシの事を馬鹿にしてやがる。

アタシは鬼が群れない事もその理由も知ってるし、隙を見せたアタシを喰うつもりなのも、その憎悪に野心たつぷりの目を見りや判る。

「チツ……………」

……………ああ、胸糞が悪い、とつとと消えろ、人の世<sup>せかい</sup>の塵<sup>ゴミ</sup>が。

「……………グレンテツセン」

疾走から更に加速し、高速で滑るように接近して抜刀し、鬼の両足を叩き斬りつつ背後に回り、足を失い落ちて来た鬼の体に追撃の一閃を叩き込み首を落とす、それで終わりだ。

「……………お、前、その姿で、鬼じゃない……………のか？」

「今際の際に気付けたただけ褒めてやる……………来世は屑に墮ちるんじやねえぞ」

塵になつて消えていく鬼に背を向けつつそう呟きながらその場を去る、少し前に狩った雑魚鬼は気付かれる間もなく背後からアサギリで切り刻んで終わりだったが、今回は少し手間取った。

そこそこ人間を食っていたせいで実力がついていたらしい、アタシの奇襲がバレてしまった……とはいえ、奇襲に気付けただけで結果はご覧の通りだが。

……この世界に来てから早ふた月、定期的に奴らの同族と勘違いされるのは、もう慣れた……

いや、鬼狩りの連中に間違えられるのは半分仕方ないと思うが、鬼にまで勘違いされる事があるのは何なんだ。

そのうち半分くらいは匂いで気付いて「姿を真似て誤魔化せる訳無いだろ」と馬鹿にした上で襲い掛かって来やがった、別にコレはテメエらの真似じゃねえし生まれつきだクソが！

さて、そんなアタシが今居る場所はとある農村の近くにある裏山だ。

鬼狩りから逃げつつ情報収集をしている最中、どうも鬼の被害に遭い始めている雰囲気を感じたので鬼狩りの代わりに奴らを狩ろうと思いついた、今しがた終えた所だ。

鬼狩り……鬼殺隊の情報収集能力を侮っているわけじゃないが、どうしてもその性質上後手に回らざるをえないからな。

恐らくアイツらがこの村の状況に気付くのはもっと被害が酷くなってからだったろう、うちのシャオオラクル船団の管理統制を行っているすごいヤツ、二代目。みたいに先の事がある程度演算で予測出来りや先手を打てるが、そんな手段ねえし。

ま、ともかくコレで一件落着だ、今後ヨソから鬼が来ない限りは、若しくはこの村に頭無惨な鬼の首魁が現れなければ、だがな。

ちなみに今のアタシの格好は『ケンランバカマ紅』、PSO2の和装シリーズの一つだ。一応この世界の時代に合った服装をチョイスした。

今は外していたが、日中は『自由惑星……なんちゃらベレー帽正名称、自由惑星同盟軍ベレー帽。某英伝コラボアイテム。セキレイは興味の無い物の名前は基本うる覚え。』を頭に被って角をどうにか誤魔化している。

ぶつちやけ他の手持ちの和装は『ヒメナギセイカイ紅いわゆる巫女

服っぽいヤツ。』ぐらいしか無かったからな。

まっ、現状を考えれば十分及第点だろ。

ただ、服装は問題ない筈なんだが、結構視線が集中するんだよなあ……髪色が明るめの青みがかかったグレーに緋色と山吹色のオツドアイの時点でもうどうしようもねえか。

正直言うと普段任務中に着てた『アドミラマリーネ曜海軍提督っぽい衣装。』とか着たいトコだったんだけどな。

……この時代の軍やら警察やらに目を付けられるのはマジで面倒だからなあ……我慢我慢。

「はあ……メンドくさ……」

ああ、あの頃が懐かしい、服装にケチをつけられる心配もないどころか、周りのオモシロコーデで笑っていたり、ビシツとキメたコーデでクエストに行ったり……まあ、それはディスプレイ越しの三人称視点だったんだが。

「……思えば随分遠くへ来たモンだ」

元々アタシはただの人間だった、それがある時気付けば着の身着のままで見知らぬ土地に放り出され、そこで仲間と共に世界を元に戻す戦いに身を投じたりして……全てを終えたと思えば、今度はアークスシップの中。

前の世界でどうか日銭を稼いでネカフェ暮らしをしてる最中、元の世界のPSO2のアカウントが何故か使えた時から嫌な予感を感じていたが、まさか本当にオラクルに飛ばされるとは思わなかったな、それも今度はプレイヤーキャラクターに転生と来たもんだ。

そう、この『セキレイ』という身体は手塩にかけて育て上げた自キャラだった。装備品もアイテムもまるっと引継ぎだ、至れり尽くせりだ、世界が世界じゃなけりやな!!

ちなみに名前の由来は鳥の『鶺鴒』じゃなくてアタシの本名が『閑<sup>せき</sup>怜<sup>れい</sup>』だったから。まさかの本名プレイだぜ、笑えよベジータ声PSO2に出てくるキョクヤというキャラクターの声があの人声。

……ん？ ネットリテラシー？

大丈夫だ、(誰だろうと鳥の方しか連想しないから何も)問題ない。

いやあそれにしてもあの時は参ったね、立場がゲーム時代という  
安藤安藤 優。ファンタシースターシリーズにおいてユーザーが  
つけたプレイヤーキャラに対する通称。PSUのスタツフレジッ  
トで表示された『AND YOU』からきている。じゃなくて、アタ  
シは主人公と同期のアークスだったからな、ある意味立ち回りに非常  
に困っちゃった。

本当に、一歩間違えりやどうなった事か……そこら辺を実はこっ  
そりフォローしてくれてたらしいシオン全知存在。色々やりながら  
オラクル船団の管理統制を行っていたすごい存在。初代マザーシッ  
プそのもの。には、絶対に足を向けて寝れないね。

結果的に、プレイヤーキャラが二人に増えたような状況を生かして  
救えなかった筈の命を救えたりしたからな。

そう、死ぬはずだったヤツをいっぱい救って来た、オラクルでも、そ  
の前の世界でも。

とにかく必死だった。死んでしまうキャラがかわいそうだったか  
らとか、もしこのキャラがこの時も生きていればどんなifが見れる  
のだろうとか、そんなチープな気持ちじゃない。

アタシ自身が今のこういう状況に置かれる事になる前、相手の都合  
で理不尽に命を奪われた身だったから……誰かの都合で理不尽に命  
を奪われた彼ら・彼女らの事が、他人事とは思えなかったんだ。

— そうやって誰かを救おうと、必死に抗い続けてきた、だから —

「—— 怜さん、どうかしたの？ なんだか少し黄昏れていたみたいだ  
けれど……」

「ん？ ああ、昔の事を思い出してただけさ、大した事あねえよ

カナエ」

—— コイツの事も理不尽な死から救い出してえなつて、どうし

でも思っちゃもうんだよなア……



——胡蝶カナエ、原作『鬼滅の刃』で蟲柱・胡蝶しのぶの姉で、花柱だった女性剣士。

作中、主人公の物語が始まった時点で既に故人、回想等に出てくるだけだったが、それでも十分に印象を残したキャラクターだった。

漫画の時点であれだったんだ、実物に会っちまえばそりやあますます印象深くなる。出会い方にしても、他の鬼狩りの連中と比べるまでもなくずいぶんと穏やかだったからな。

因みにアタシはカナエに『セキレイ』ではなく『関 怜』で名乗っている、今でもこつちがアタシの名前だって思ってるし、此処は日本だからな。

「ていうか、何でここに……ああ、さつき殺<sup>や</sup>った鬼が目当てだったか？

悪いな、鬼殺隊<sup>オマエラ</sup>を待つてられなかつたんで先に狩らせて貰ったぜ」

ニヤリと笑いつつそう言つて、少し皮肉が過ぎたかな、と反省しつつカナエを見やると驚いたような顔をした後に目を伏せてしまった。  
あつ……

「……そう、あの村も既に鬼の被害に遭つていたのね……」

……そんな顔をさせるつもりはなかつただけどな……言葉選び、間違えちまった。

「悪い、皮肉を言うつもりじゃなかつたんだ……」

「……ううん、良いの、間に合わなかつた事実は変わらないもの」

あークソ！ 口は災いの元とは言うが、どうしてこうアタシは「クスクス……」あん……？

「……おい、カナエ？ お前まさか……」

「ごめんなさいね? でも先に皮肉を言ったのは怜さんよ?」

どうやらアタシはカナエに弄ばれたらしい……まあ、全く気にしていないワケじゃなさそうだが、切り替えて大事だしな、うん。

……別に騙された事なんざ気にしてねえし。

「もう、そんな拗ねたような顔をしないで? からかったのは私が悪かったから」

「別に気にしてないっいたら気にしてないしイツ!! ……で!? 用件は何なんだよ!?!」

「そうだよ!! 気にしてないっいたら無いんだよ!! 何度でも言ってる! 気にしてないっ!!」

「あらあら……すっかりご機嫌斜めね、これじゃあ交渉どころじゃないわね」

「あん? 交渉? ……ああ、あの件か」

「そうよ、どう? 考えてくれたかしら?」

あの件、アタシはずっとカナエから鬼殺隊へ勧誘され続けている。どうやらコイツの独断ではなく鬼殺隊の当主からの密命のようなのだが、アタシの答えは決まっている。

「悪いけどその話は断ったはずだ。アタシが鬼じゃないのはありとあらゆる手段で証明したが、未だに鬼狩りに襲われる件も気に入らないしねえ」

「それは、本当に申し訳ないと思ってるわ……でも怜さんが「あのな」……?」

そろそろアタシの立場をはっきりとさせるべきなんだろう、半端な回答で避けてきたから変に期待させちまったみたいだが、その期待に応える事は絶対に無い。

「悪いが、アタシもこれでとあるデカイ組織に身を置いてる身なんだ、鞍替えは出来んし、する気もない」

——だってアタシは、アークスだから。

大半の鬼狩りに言わせればアタシは異端の力を使う者だ、鬼の血鬼術とは当然違うが、アタシは奴らの言う所の異端の力を使っている。

水と油とまでは言わない、だが相容れることは決して無い、日本っ

てのはそういう国だ、アタシがかって生きていた時代も、この時代も変わりはしない。

自分達と違うものを極端に嫌う、嫌悪する、排他する。曖昧な表現が得意だから外から見たら気付きにくいだけ、お客様なら丁寧に招くが、そうでなければ村八分だ。

「ついでに言うと、アタシの肩書きもお前らで言う所の柱みたいなモンなんでね、後は判るだろう?」

「……!? そう、だったのね。道理で強い筈だわ……」

アタシは本来居る筈の無かった存在、居る筈の無かった3人目の守護輝士ガーディアン。なるつもりは無かった、けどシオンの遺言じゃ無碍にも出来ない。

お陰さまで気付けば英雄の一角だ、アタシは英雄とは程遠い存在なのに。

それでもオラクルの皆は、そんなアタシを大事な仲間だと、友だと言ってくれる。そんな仲間達が、戦友達が、アタシにとっちゃ掛け替えのない大事なモンなんだ。

だからアタシは、鬼を狩る事はすれど鬼殺隊に所属する気は欠片も無い、二束の草鞋を履く気は無い。気持ちの問題と言われるかもしれないが、これって結構大事な事なんだ、自分が何者かを見失わない為に。

大体、仲間意識アタシを鬼と疑う奴らの無い奴らの中に混ざっても不和を生むだけだ、誰も得はしない……ただそれを勘定に入れても、アタシの力を利用したいんだろうなあ、鬼殺隊の当主殿は。

だが、アタシと鬼殺隊じゃ鬼に対する感情が違いすぎる。

あいつらは『鬼』に対して強い気持ちを持っている、熱量を持っている。これ以上被害を増やさないとか、同じ思いをする人を増やさない為とか、鬼への復讐心とか、色々あるが、アタシには『鬼』に対するソレが無い。そういう熱量の違いは、いずれ大きな軋轢を生む。

アタシは、アークスだ。現地の危険生物の排除による生態系の保護・維持が仕事の一つだ。

仕事に対する使命感とかやる気、熱意はあれど、鬼に対するスタン

スはどちらかと言えば害獣駆除と変わらない。

そして、アタシ自身の『理不尽な死に対する抵抗の意思』が『全ての鬼』に向く事は無い。アタシが救いたいと思っても救えないヤツは居る、それを嫌というほど経験して、理解しているから。

アタシは全てを救える英雄じゃない、アイツらとは違う、身の程を弁えてる、全てに手を伸ばして本当に大事なモンを取りこぼすような愚かな真似は決してしないと心に誓ってる。

だから、

「ま、そういうわけで、だ——」

「残念、ふられちゃったわね……」

「——外部協力者って形なら、手を貸してやれるぜ？」

コイツらとしつかりと足並みを揃えるのは、最後の最後だけだ。

「……えっ?」

アタシの言葉を聞いて呆けるカナエを見て、思わず盛大に笑ってしまった。

……別にさつきからかわれた仕返しじゃねえぞ?